

# 福岡大学病院におけるがんゲノム医療の現状と取り組み —がんゲノム医療コーディネーターの立場から—

常光 好美<sup>1)</sup> 大久保久美子<sup>2),3)</sup> 田中 俊裕<sup>4)</sup>  
吉田陽一郎<sup>5)</sup> 井上 博之<sup>6)</sup> 山田 哲平<sup>5)</sup>  
松崎 洋吏<sup>7)</sup> 倉員 正光<sup>2),8)</sup> 濱崎 慎<sup>9)</sup>  
鍋島 一樹<sup>9)</sup> 高松 泰<sup>1),4)</sup>

- 1) 福岡大学病院がんセンター
- 2) 福岡大学病院遺伝医療室
- 3) 福岡大学医学部臨床検査医学
- 4) 福岡大学医学部腫瘍・血液・感染症内科学
- 5) 福岡大学病院消化器外科
- 6) 福岡大学医学部呼吸器内科学
- 7) 福岡大学医学部腎泌尿器外科学
- 8) 福岡大学病院産婦人科
- 9) 福岡大学医学部病理学

要旨:本邦での保険診療内がんゲノム遺伝子パネル検査が2019年6月より開始され、2年8か月が経過した。福岡大学病院では、保険診療開始時より中核拠点病院である九州大学病院と連携し、がんゲノム医療連携病院としてがん遺伝子パネル検査を実施してきた。2019年10月より2021年8月までの実績を踏まえ現状を報告し、課題について考察する。2019年10月から2021年8月にがん遺伝子パネル検査を実施した症例は62例であり、年齢中央値58歳(3~81歳)、男性34例、女性28例であった。組織検体の品質状況は解析可能57例(92%)、解析不能5例(8%)であり、理由はDNA品質不良(3例)、DNA取量不足(2例)であった。月別検査実施件数は、当初1年間は平均2例であったが、その後徐々に増加して2021年8月は9例となった。臓器別実施件数は肺13例、大腸/小腸10例、胃/食道10例、軟部組織8例、乳腺7例、前立腺6例、副腎1例、脳/神経5例、その他2例であった。診療科は消化器外科20例、腫瘍・血液・感染症内科16例、呼吸器内科13例、腎泌尿器外科7例、小児科6例であった。病的遺伝子バリエーションの種類と頻度は全がん腫においてはTP53が最も多く(73.2%)、次いでCDKN2A(30.4%)、CDKN2B(26.8%)、KRAS(21.4%)、MTAP(19.6%)、APC(16.1%)、EGFR(16.1%)であった。TP53に次いで、乳がんではPIK3CA、PTENが多く、前立腺がんではBRCA2が多かった。パネル検査に基づいた治療の提案は46例に可能で有り、治療の内訳は臨床試験42例、うち患者申出療養2例およびコンパニオン診断薬3例、保険適用薬1例であった。しかし実際に治療実施可能であったのは6例だった。二次的所見(疑)は9例に認められ、TP53(4例)、BRCA2(3例)、ATM(1例)、CHEK2(1例)であり、更に遺伝カウンセリングに至ったのは4例であった。2例は病状急変により結果説明に至らず検査費用一部請求不能となった。今後の課題として検体品質の担保、検査時期の考慮、二次的所見(疑)症例を如何に遺伝カウンセリングへつなぐかという事が考えられた。

キーワード:がん遺伝子パネル検査, がんゲノム医療, がんゲノム医療連携病院, C-CAT, 二次的所見